

<公民>

知識の定着を促し思考力・判断力・表現力を高める指導の工夫 — 知識の構造化を図り活用する協同学習を通して —

沖縄県立久米島高等学校教諭 小嶺栄作

I テーマ設定の理由

現代は知識基盤社会ともいわれ、知識が社会や経済の発展の基本的な要素となると考えられており、こうした考え方は平成22年に示された「高等学校学習指導要領解説公民編」の総説においても「このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイディアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』を育むことがますます重要になっている」とある。その「生きる力」の重要な要素である「確かな学力」には、「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの要素があり、ここでも「知識」は2つの要素にまたがる重要な位置づけとなっている。それに加えて、平成21年告示の高等学校学習指導要領においても「生徒の思考力・判断力・表現力等を育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、(中略) 生徒の言語活動を充実すること」とあり、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためには、その前提条件として知識や技能の習得が欠かせないものとなっていることがわかる。

私が受け持っている生徒の実態を考えると、定期考查で、知識や理解度を確認する穴埋め問題などは比較的よくできるが、知識を活用して表現する問題を苦手とする生徒が多い。これは知識の習得はできているが、活用の段階がうまくいっていない結果だと思っていた。しかし、生徒の解答用紙をよく見直してみると、穴埋め問題の中でも教科書やワークシートと同じような文章の問題ではよくできているが、空欄の前後の表現を変えた問題や、質問の仕方を変えた問題などは、正答率が大きく下がっていることに気づいた。これはテストのための丸暗記をしているだけで、実質的には習得さえも不充分だと思われる生徒が多数いるということである。このような体系化されていない知識は断片的なものであり、つながりがないために定着率が悪く、応用も利かない知識となりがちである。

このような生徒の実態をふまえて、断片的な知識ではなく、より体系的な知識を身に付けさせるために、学習活動に知識の構造化を図る作業を取り入れることを試みたい。具体的には、生徒に「知識の構造図」に準ずるもの（以下「知識ピラミッド図」とする）を作成させることによって、知識の構造化が図られ、体系的な知識の定着が促されると考える。そして知識ピラミッド図の作成作業や、それによって習得した知識を活用した発展的な課題解決を、協同学習によって行うことで、思考力・判断力・表現力も高まると考える。

<研究仮説>

現代社会の「日本国憲法の基本的性格」という単元において、調べたことや考えたことを基にして知識の構造化を図り、それらを活用した発展的な課題を協同学習を通して学ぶことによって、知識の定着が促され、思考力・判断力・表現力も高まるであろう。

II 研究内容

1 思考力・判断力・表現力を高める指導

(1) 公民科における思考力・判断力・表現力とは

公民科における思考力・判断力・表現力とは何かというと、小原友行（2009）は「社会科が求め『思考力・判断力・表現力』とは、既に習得している基礎的な知識・概念・技能を活用して、社会的事象や問題に対する『どのように、どのような』『なぜ、どうして』『どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか』という問い合わせていく力ととらえることができよう。換言すれば、知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力である」と表現している。これは中学校社会科における思考力・判断力・表現力の定義であるが、高等学校公民科の定義もこれに準ずると考える。その理由は、高等

学校公民科の教科の目標が「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」と定められており、中学校社会科の目標をより深化・高度化させたものとなってはいるが、その内容は大きく異なるわけではなく、教科としての類似性が高いためである。

本研究では上記を踏まえて、習得した知識を「知っている」だけの段階から、その背景までも考へて自分の意見に基づいて表現でき、それをもって社会に参画していくことを考える力にまで高めたいと考えた。これはグローバル化に伴い、いっそう多様化する現代の国際化社会において、価値観の異なる相手と粘り強く交渉し、合意に達することができる能力が今後より必要とされる社会になると考へるからである。

(2) 思考力・判断力・表現力を高める手立て

思考力・判断力・表現力を高めるための手立てとして、知識ピラミッド図を作成する段階と、できあがったあとにそれをもとにして発展的な課題への取り組みを、協同学習によって行う。具体的には、後述する「知識の構造図」における概念的知識や具体的知識などについて、さらにその背景や判断を問う課題（「どのように」「どうして」「どうしたらよいか」）を課し、ペアまたはグループで意見を練り合い、発表しあうことによって思考力・判断力・表現力が高まるのではないかと考える。

2 知識の構造化

(1) 知識の構造化とは何か

① 知識の分類

学習指導要領の改訂にともない、思考力・判断力・表現力等の育成がいっそう重視されることになったが、このことは知識の習得を軽視しているわけではなく、むしろその延長線上にあるものである。なぜなら、思考力・判断力・表現力等はその材料となる知識を活用することによって育まれる力だからだ。このベースとなる知識の習得方法について、岩田一彦（2001）は「学習内容には構造が不可欠である。構造のない学習は、断片的知識の詰めこみに走りがちである。社会科が長い間、知識の詰めこみ教科と言われつづけてきたのは、知識の構造を明示できなかったからである」と知識の構造化を提唱している。構造化された知識は連鎖しやすく、やがて抽象的な概念の理解にもつながり、体系的な知識として定着し、思考力や判断力、表現力にも大きく関わってくると考えられる。

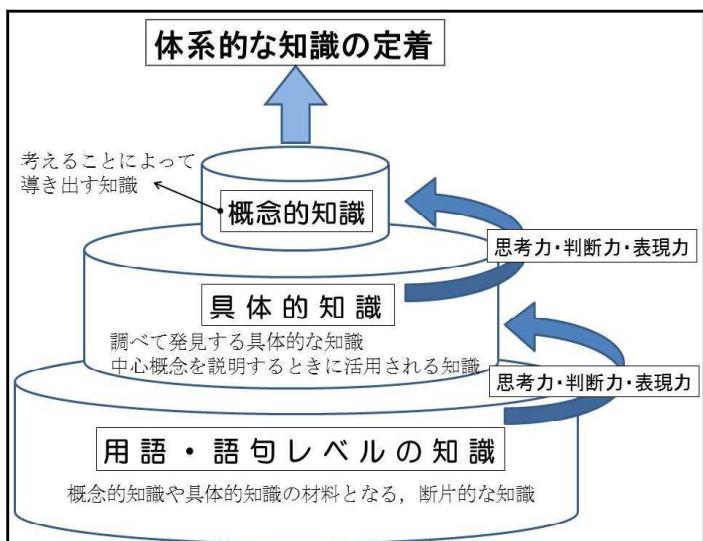


図1 知識の分類と関係

ここで構造化される知識を北俊夫（2011）の文献を参考にして、知識の分類と関係を図示した（図1）。「概念的知識」は単元の中心概念となるもので、その単元の学習目標と重なるものである。中心概念は多くの場合、社会的事象の特色や役割、社会の様子や傾向などを表現したもので、概念的・抽象的な内容であり、目に見えないものである。これは調べたことをもとに「どうしてだろうか」とか「どういう意味や役割をもっているのだろうか」などと考へることによって導き出されるものである。そしてこの概念的知識を説明する際に必要となるのが「具体的知識」である。これは生徒たちが観察や調査、資料を活用する等、調べることによって収集することができる目に見える知識である。また、「用語・語句レベルの知識」はそれらの意味や内容を理解していないと、社会事象そのものの理解ができないような知識であり、前述の二つの知識の材料となるものである。これらの知識は階層構造をなしており、「用語・語句レベルの知識」から「概念的知識」を得る場面や、「概念的知識」を活用して「概念的知識」を導き出す場面においても思考力・判断力・表現力が育成されると考えられる。

② 知識の構造図

本研究における知識の構造化とは、上に示した「概念的知識」と「具体的知識」と「用語・語句レベルの知識」の三種類の知識を構造的に整理したものである（図2）。下段にあるほど断片的で具体的であり、上段にあるほど総合的で抽象的な知識となる。したがって、上段の知識を獲得させるためには下段から段階的に知識を関連付けさせる必要があり、その過程で思考力・判断力・表現力も高まっていくと考えた。知識を構造化する意義は、単元ごとに取り上げられる知識を抽出し階層的に整理することによって、授業で何を教えるのかを明確にすることができるのである。それにより、生徒の学びの内容が知識の観点から明らかになる。生徒の学びの道筋が整理できれば、生徒の思考をどのように深めるか、そのための発問や助言を教師はどう構成するかがはっきりし、より具体的な指導計画をたてることができる。

(2) 生徒の学習活動に取り入れる意義

本研究では生徒にも知識の構造図に準ずる知識ピラミッド図を作成させる（図3）。図に表すことで、断片的な知識となりやすい「用語・語句レベルの知識」とそれらを統合した「具体的知識」との間の関連性が、視覚的に把握でき、知識の再構成を促すことができたためである。知

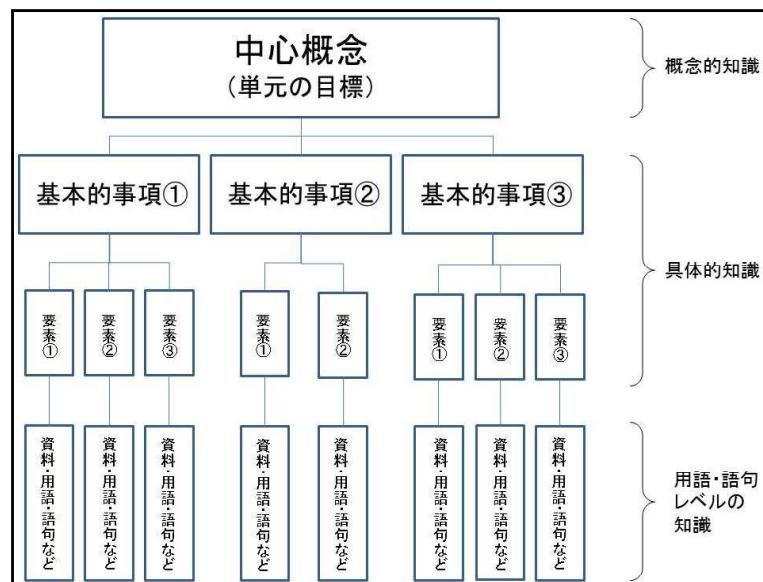


図2 知識の構造図

日本国憲法は、大日本帝国憲法の天皇主権や人権意識の希薄さという反省点をふまえて作成され、「国民主権」「基本的人権の尊重」「平和主義」を三大基本原理としてもつ。憲法は国の最高法規として位置づけられ、国民の権利や生活を国家権力の暴走から守るという意義をもつ。

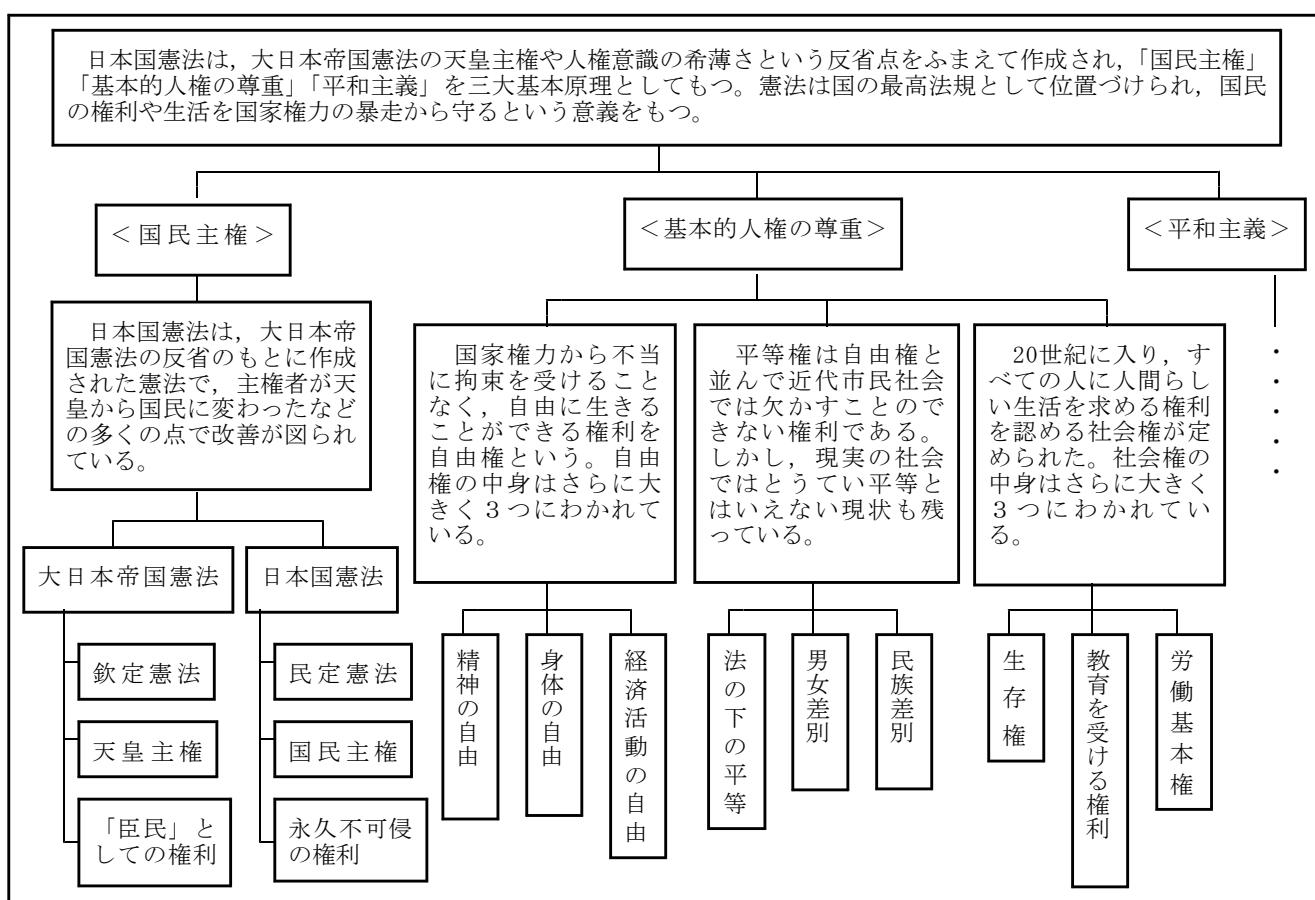


図3 知識ピラミッド図 (例)

識を一つのまとまりとして体系的に捉えるためには、例えばその関連性や階層性など、知識を構造的にとらえる視点が必要になる。知識相互の関係性がわかつてくると、社会の現象をより総合的に捉えることができるようになり、学ぶ楽しさやわかる楽しさに気づき、学習意欲も喚起されると思われる。

教師が知識の構造図を作成する際、単元の目標となる概念的知識から小単元ごとの目標となる具体的知識、それぞれの「用語・語句レベルの知識」へと、抽象から具体へのトップダウン型で作ることになるが、生徒が作成する場合にはこれと反対に、個々の知識を具体から抽象へとボトムアップ型で積み上げていくことになる。このように知識を図化するという手法で整理・表現させることによって、知識の全体像が目に見えるようになり、生徒に学習成果の自己評価を促すという効果も期待できる。ここでいう自己評価とは、理解や思考の変化といった学習の成果を自覚でき、学習に対する成就感・達成感を味わわせることができるといったものである。こういった自己評価は学習意欲の向上にも繋がると考えられる。

3 協同学習について

(1) 協同学習とは

ジョンソン、ジョンソン＆ホルベック（1993）によると、協同学習とは「自分自身と他の学友たちの学びを最大にするために、小グループを使って一緒に勉強させる学習指導法のこと」と定義されている。また、佐藤学（2003）は協同学習は競争学習や個人学習に比べて、多くの点で学習効果が高いことを示している（表1）。協同学習は研究者や実践者によって理論や手法に違いがあるが、共通する点は、従来の競争的な視点から脱却し互恵的な関係の中で生徒同士が学び合うことによって、学力のみならず、社会性などの面でも成長が見られるということである。

表1 協同学習のメリット

- ①小グループ活動であるため、（自信がない場合も）気軽に自分の意見が言え、学びに参加できる。
- ②多様な考え方をすり合わせたり、新しい考えを共同で考え出す事ができ、学びに広がりができる。
- ③わかるまで仲間に聞くことができる。
- ④教師は支援の必要な子どもに必要な支援ができる（個別指導ができる）。
- ⑤できる子どもが低学力層の子どもたちをケアし、集団の学力アップにつなげられる。
- ⑥高学力層の子どもにとっては自分の知識をより確かにすることとなり、低学力層の子どもにとっては学ぶ事をあきらめなくなるといった相乗効果が期待できる。
- ⑦全体の学力が上がるため、さらに発展的な問題にも挑戦でき、学びの質を高める事ができる。

(2) 本研究への取り入れ方

本研究では次の2つの場面において協同学習を取り入れたい。1つは、知識ピラミッド図の作成過程で具体的知識や概念的知識を考える場面である。一人では知識ピラミッド図を完成させるのが難しいと感じる生徒も、相互に教え合うことによって、学習に参加できるからである。もう1つは、発展的な課題として、各授業の具体的知識から派生する実社会における矛盾点や問題点の解決方法について話し合う場面である。協同学習で多様な考え方をすり合わせる活動を通して、他者の視点に気づき、自分の理解や解釈だけにとらわれることなく知識の再構築が起こることが期待できる。いずれの場面においても、習得した内容と教科書や資料集などにある資料を活用して思考するよう指導を行い、論理的な議論に発展するように心がけたい。協同学習を取り入れることによって、一人では到達することが困難な学習レベルでも、仲間との協力で学びの質が上がり、目標を達成できると考えられる。

検証授業においては、課題によってペアでの活動と小グループでの活動の時間を設定する。小グループの規模については、人数が多くなると個々の責任が分散し、活動や発言にも偏りが生じやすくなるため、1グループ5人程度と設定する。

III 指導の実際

1 対象生徒

知念高等学校2年2組（男子18名、女子22名）

2 単元名

第2章 日本国憲法の基本的性格

3 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
現代の民主政治に対する関心を高め、基本的人権の保障、国民主権、議会制民主主義、平和主義などを意欲的に追究し、考えようとしている。	現代の民主政治から課題を見いだし、民主社会において求められる価値や民主政治を基礎付ける考え方などについて多面的・多角的に考察し、民主政治の在り方について社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断している。	現代の民主政治に関する諸資料を様々なメディアを通して収集し、収集した資料の中から民主社会において求められる価値や民主政治を基礎づける考え方などについて学習に役立つ情報を主体的に選択して活用できる。	基本的人権の保障と法の支配、平和主義と我が国の安全など日本国憲法の基本原則について理解し、その知識を身に付けている。

4 指導計画（7時間）

時	学習項目	学習内容	指導上の留意点	評価
1	日本国憲法の制定	日本国憲法の制定過程と日本国憲法の三つの基本原理を理解する。	大日本帝国憲法との比較によって、日本国憲法の三原則を捉えさせる。	知識・理解
2	自由に生きる権利	日本国憲法が保障する自由権の内容について理解する。	精神の自由、身体の自由、経済の自由の区別をはっきりさせ、人権侵害の恐ろしさを考察する。	資料活用の技能 思考・判断・表現
3	平等に生きる権利	日本国憲法が保障する平等権の意味を理解し、今も残る差別の問題について考察する。	差別問題を考えさせる際には、様々な観点からの配慮を要する。	知識・理解 思考・判断・表現
4	ゆたかに生きる権利 新しい人権	日本国憲法が保障する社会権を理解する。 新しい人権の内容について理解を深める。	社会権と新しい人権は、自然権的な人権とどのような点で異なるかを考えさせる。	知識・理解 関心・意欲・態度
5	人権のひろがりと公共の福祉	参政権、請求権、国民の義務と公共の福祉について理解する。	個人の人権よりも優先されるものはどのようなものかを考えさせる。	知識・理解
6	平和主義とわが国の安全	日本国憲法における平和主義の意味を理解する。	憲法前文と第9条にかかれている平和主義の理念の背景を考えさせる。	知識・理解 思考・判断・表現
7 本時	こんにちの防衛問題	自衛隊と日米安全保障体制の役割変化について考察する。	自衛隊の役割や安全保障の理念は、時代や国際情勢の影響を大きく受けれるが、憲法の平和主義の理念は普遍的なものであることに気づかせる。	知識・理解 思考・判断・表現

5 本時の指導

- (1) 題材名 こんにちの防衛問題
 (2) 教科書 新版 現代社会（実教出版）
 資料集 新編 テーマ別資料 現代社会2011（東京法令出版）

- (3) 目標
- ① 国際情勢の変化のなかで、自衛隊の役割が変化してきていることを理解する。
 - ② 日米安保体制の変容を理解し、これからの平和主義と防衛政策のあり方を考える。
 - ③ 単元のまとめとして、日本国憲法の特徴を再確認する。

(4) 学習の展開

	学習内容	指導上の留意点（△は発問）	生徒の活動	備考
導入 4分	○号令、出席 ○前時の振り返りと本時の目標		○憲法9条、自衛隊設立の経緯と、日米安保体制について再確認。 ○本時の目標を確認	
	○自衛隊の仕事 防衛出動・治安出動・災害派遣・民政協力等	△「自衛隊の仕事にはどのようなものがあるでしょうか」と問い合わせ、ワークシートに書き出すよう指示する。 ○数名に発表させる。	○自分のイメージで自衛隊の仕事を考える。 ○意見の共有化	・個人活動

		○資料集p. 182にて確認するよう指示する。	○知識の整理	
展開 38分	○自衛隊の役割の変化と日米安保体制の変容 個別の自衛権 → 集団的自衛権	○国際情勢の変化に伴う自衛隊の役割の変化や日米安保体制の変容について説明する。		
	○知識ピラミッド図の作成	▽「これまでの学習を踏まえて、ピラミッド図を完成させましょう」 ○机間指導し、適宜支援を行う。	○知識ピラミッド図の作成を通じて、ここまで学習を整理する。	・個人活動
	○集団的自衛権についての話し合い活動	▽「集団的自衛権の行使についてもう少し考えてみましょう」		・グループ活動
1. 日本に関係のない戦争に巻き込まれるのはどんな場合か? 2. このような危険があっても集団的自衛権を認めないといけないのはなぜか? 3. 非軍事的に平和をめざすために日本はどうすべきか?				
まとめ 8分	○ワークシートの設問（上記1～3）に沿って、グループで協力してまとめるように指示する。 ○机間指導し、適宜支援を行う。 ○いくつかのグループに発表させる。	○グループ内で意見交換を行い、グループとしての意見をまとめる。 ○発表しているグループと自グループの意見を比べて、確認する。	○本時の学習で得られる「具体的知識」をまとめる。	・個人活動及びグループ活動
	○今日のまとめ（「具体的知識」に相当）	○今日のまとめを指示 ○机間指導し、適宜支援を行う。	○グループで話し合い、発表まで行う。 ○発表しているグループと自グループの意見を比べて、確認する。	・グループ活動

(5) 本時の評価

① 生徒評価の観点

思考・判断・表現	集団的自衛権の行使についてや、これからの中防衛政策について考えることができる。
知識・理解	日米安保体制の変容と、自衛隊の役割の変化が理解できる。

② 教師の自己評価

目標に準拠した評価	ワークシートと知識ピラミッド図で、学習の達成度を分析し、次時に活かす。
指導と評価の一体化	生徒の授業での取り組み状況と、「今日のまとめ」を点検して指導方法を見直す。
評価方法の工夫・改善	信頼性・客観性の高い評価方法を工夫する。

6 仮説の検証

本研究では知識の定着と思考力・判断力・表現力を高める目的で、知識ピラミッド図と協同学習を取り入れた指導の工夫を行った。研究仮説にあるように、知識の構造化を図りそれを活用した発展的な課題を協同学習を通して学ぶことにより、知識の定着が促され、思考力・判断力・表現力を高めることができたかについて検証を行う。検証方法は、検証授業前後に生徒が作成したイメージマップの比較と分析、検証授業前後のアンケート調査の結果、授業中の生徒観察を材料に考察をしていく。検証授業前後の調査は、アンケート、イメージマップとともに15分程度の時間で行った。検証にイメージマップを利用したのは、語句数の増減がわかりやすいということと、枝分かれ部分に着目することによって、語句の意味的な関連を把握しているかどうかを見ることができると考えたからである。イメージマップに書き込まれる語句数が増えれば、知識の定着率が高まっていると捉え、枝分かれやグループ化が多く関連性も正確であれば、知識の構造化が進んでいると見ることができるであろう。

(1) 知識ピラミッド図の作成による効果

① 知識ピラミッド図の作成について

本研究の検証授業において、すべての授業でその時間のまとめとして知識ピラミッド図を作成

させた。知識ピラミッド図の作成については、はじめは構造図に似たひな形を教師が作成し、その空欄補充をするような形で作り方を学ばせて、徐々に教師からの提示を減らして自由度を高めていくことで、最終的にはオリジナルの知識ピラミッド図を作成できることを目指していた。しかし生徒達の授業での取り組みを見ていると、ひな形を提示しても具体的な説明や注釈がないとなかなか作業を進めることができず、7回の授業では生徒自身で作成することができそうになかったため、今回の検証授業では図4のように、すべて教師が作成したひな形をプリントにして作業をさせた。

② 効果の分析（イメージマップから）

知識ピラミッド図を自由記述で書かせることができなかったため、かわりに検証の前後で生徒が書いたイメージマップを使って、知識の定着率や体系化の変化について分析する。生徒Aが検証授業の前後で書いたイメージマップを比較した図5を見ると、まず記述された語句の数が8語から22語と約3倍に増加していることがわかる。そして検証後では憲法の三原則（国民主権・基本的人権

の尊重・平和主義)など、関連する項目ごとのまとめや枝分かれが多く見られ、授業で取り組んだ知識ピラミッド図に近い作りに変化している。さらに、検証前では「不安」「ゆとり教育世代」「平成」「エコカー」などのように、学習した単元の内容とは直接関係のない語句が多く記述されていたのに対し、検証後では記述された語句のほとんどが単元の学習内容に即した用語となっている。生徒に聞いたところ「最初のイメージマップ作成時には、何を書けばよいのかあまり思い浮かばなかったので、授業で学習した内容にこだわらずに連想ゲームのように言葉をつなげていったが、2回目はわりとすらすら書けた」と答えていた。学習内容が頭の中で整理された結果の現れだと考えられる。生徒Aのイメージマップには「基本的人権の尊重」という語句から「新しい人権」「社会権」「平等権」の3つの語句への枝分かれと、「社会権」から「生存権」「労働基本権」へ、「新しい人権」から「自己決定権」「環境権」「プライバシーの権利」「知る権利」への枝分かれが見られる。これらはそれぞれ関連する上位概念から下位概念に分岐したものであり、知識が関連のあるまとめごとに階層化され、構造的に理解されていることが読み取れる。

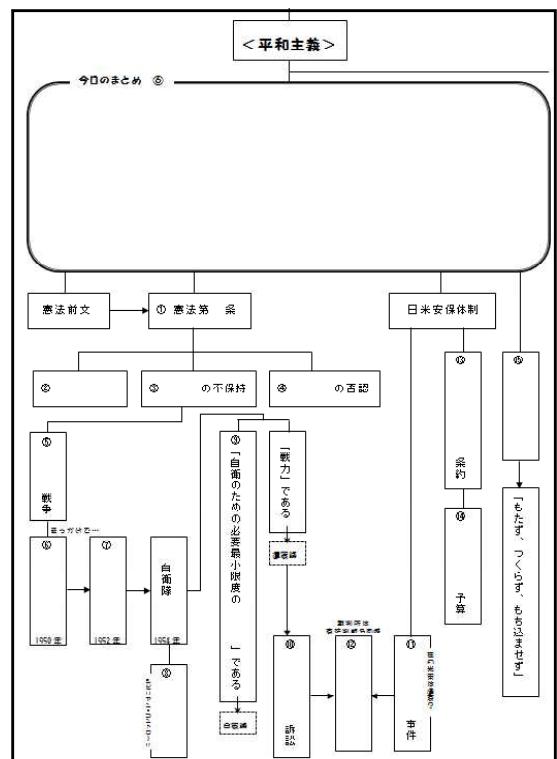


図4 知識ピラミッド図のプリント例

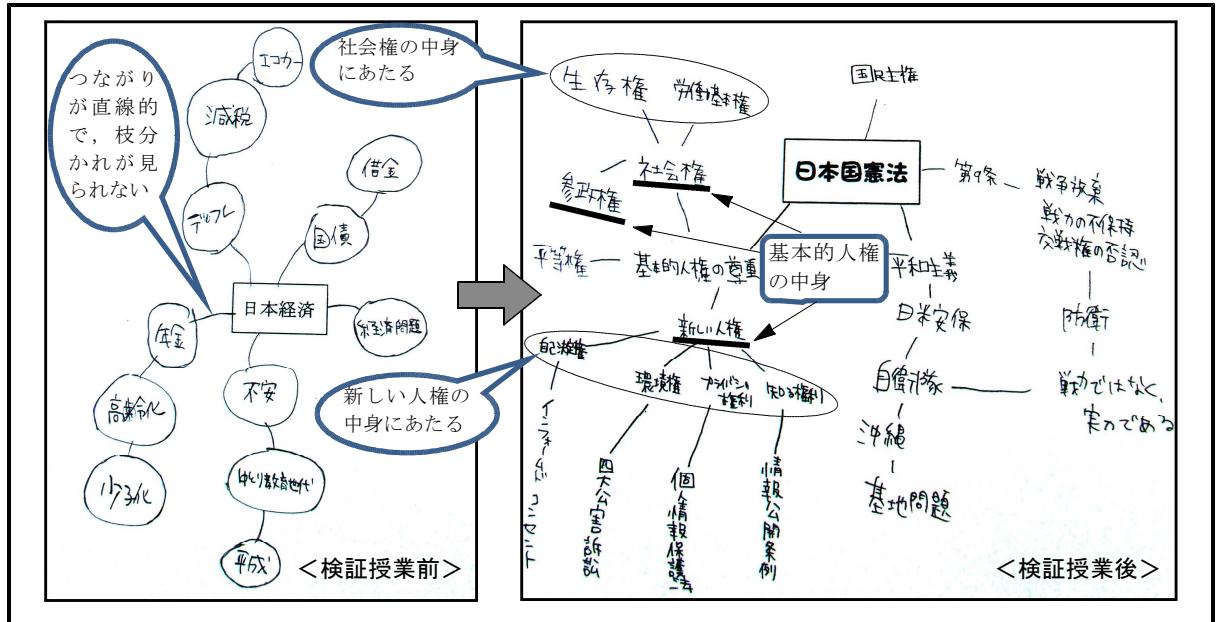


図5 生徒Aのイメージマップ比較

次に全体の分析を行う。全員のイメージマップに書かれた、語句や文章の総数（総語数とする）と、単元で学ぶ用語の数（有効語数とする）を棒グラフで表した（図6）。両方とも事前より事後の方が増加していることがわかる。つまり、記述できた語句の数が増えた上に、そのほとんどが学習事項をふまえた内容になっているのである。特に有効語数に関しては、296語から662語と2倍以上の伸び率となっており、学習した知識の再生量の増加が顕著に見られた。なお、有効語数を

総語数で割った割合（有効率）の増加は36名中33名で見られ、特定の生徒たちだけによって有効語数が引き上げられたわけではなかった。有効率の平均は検証前が約40%，検証後が約80%となっており、書いた語句がすべて学習内容である有効率100%の生徒が10名もいた。また、前述した生徒Aのように、ほとんどの生徒のイメージマップで、事前より事後の方が枝分かれが多く見られることから、知識ピラミッド図の作成を通して知識の構造化が図られ、その結果知識の定着が促されてイメージマップでの再生量増加に繋がったのではないかと考えられる。

③ アンケート調査からの分析

検証後のアンケートで「『知識ピラミッド図』は学習内容の習得に役立つと思うか」という質問に対する回答を円グラフに表した（図7）。このグラフから87%の生徒が肯定的な意見であることが読み取れるが、その理由は「図にすることによって、見やすいし、わかりやすい」という内容のものがほとんどを占め、そのほかにも「流れやまとまりをつかみやすい」「いろいろなことが繋がっていることがわかった」「授業のおわりにピラミッド図

を書くことで、今日の学習を振り返ることができる」など、知識の体系化に繋がる理由も多く見られた。反対に「あまり役に立たない」と答えた生徒の理由は「空欄をうめることが優先されて、内容理解ができなかった」「普通に用語を覚える方がよいので、あまりよくわからなかった」「ごちゃごちゃしている」「私の場合はもう少し具体的に内容を知りたいから」などで、従来の教師主導型で板書中心の一斉授業からのギャップが主な原因と思われる内容であった。ただ、授業観察を通して感じたことは、多くの生徒が授業を重ねるごとに知識ピラミッド図の完成にかかる時間が短くなり、しだいに要領を得ていく様子が見られたので、ギャップを感じている生徒も継続することでうまく活用できるようになっていくのではないかと考える。

(2) 思考力・判断力・表現力を高めるための協同学習

① 授業観察からの分析

本研究では全7回の検証授業のうち、5回の授業で協同学習を取り入れた。協同学習にあてた時間は毎回異なるが、一つの課題につき概ね10分から15分程度である。話し合った内容は、それぞれの授業ごとの「学習内容のまとめ」に相当する「具体的知識」や、各時間ごとの発展的な課題である。40名のクラスを座席の近い者同士5名ずつの8グループに分けて話し合いをさせた。これまでにこのような学習活動の経験が少なかったということで、はじめはなかなか話し合いができずにいたが、「グループの意見を一つにまとめなくてもいいから、自分の考えたことを話してみよう」「自分がわからなくても、グループの誰かはいい考えを持っているかもしれないから聞いてみよう」と指示を出すうちに、しだいに自発的に話し合いができるようになっていった。また、最初の発表では、ほとんどのグループが資料集で見つけたデータを読み上げるだけだったのが、最後には、教科書や資料集からは直接読み取ることができないことまで自分たちの言

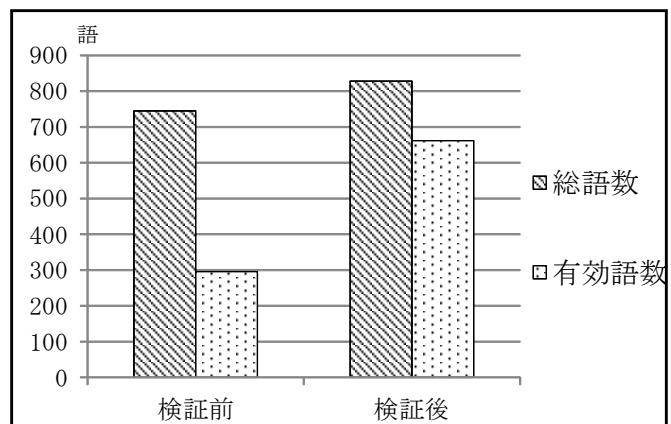


図6 イメージマップの語数比較

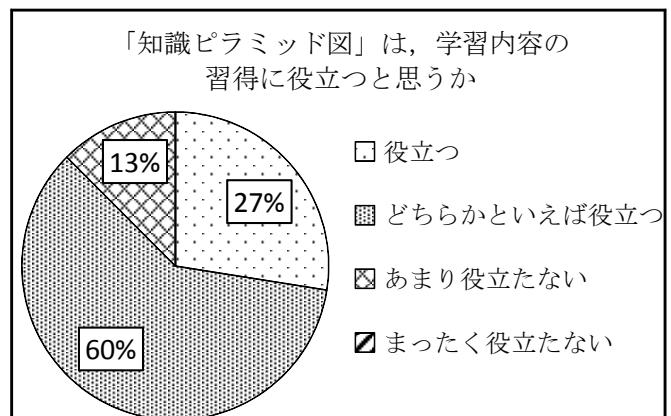


図7 知識ピラミッド図の有用性

葉で発表することができた。特に7時間目の「日本が集団的自衛権の行使につながる活動を容認しなければならないのはなぜか?」という課題に対して出た「日本は貿易立国で、エネルギーや食糧の自給率も低いから、貿易相手国と仲良くしなければ国がたちゆかなくなる。だから、多少の危険や憲法解釈上の問題があっても他の国と歩調を合わせる必要があると思う」という意見は憲法の知識のみならず、日本の置かれている立場や実社会が抱える様々な問題を総合的に考えた視野の広い意見であり、グループのワークシートを確認したところメンバーのそれぞれの意見が統合されたあとが見えたので、練り合いの効果があったと思える。

② アンケート調査からの分析

検証後のアンケートから、協同学習に関する事項を表2にまとめた。その結果を見ると、設問1からは話し合い活動がうまくできたと思っている生徒が少ないことがわかる。その理由は「話せる人と話せない人がいる」「男女の仲があまりよくないから」「グループが協力的ではなかったから」などが多数を占め、話し合い活動をする下地が充分にできていなかつたことがうかがえる。しかし、設問2では90%以上の生徒が他人の意見で新たな発見があったことを認めており、設問3からは他人の意見に影響を受けて自分自身の意見が変化した生徒が70%以上もいることがわかる。さらに設問4で他人との話し合いが自分自身の考えを深化させることに役立つと考える生徒が80%もいることから、生徒自身も話し合いの重要性自体は理解しているものの、クラスの人間関係や今まであまり経験していない話し合い活動への戸惑いがあって、積極的に話し合い活動でできない現状がうかがえる。

また、授業前と授業後のアンケートの比較を見ると、「お互いの意見を話し合う学習を大切だ

表2 協同学習の効果についてのアンケート結果

設問	選択	人数	割合
1 授業中のペアやグループでの「話し合い活動」を積極的に行うことができましたか?	ア. できた	3	7 %
	イ. どちらかといえばできた	13	33%
	ウ. あまりできなかった	18	45%
	エ. まったくできなかった	6	15%
2 授業中のペアやグループでの「話し合い活動」において、友達の意見や発表を聞いて「なるほど!」とか「すごい!」と思えたことはありましたか?	ア. よくあった	9	22%
	イ. ときどきあった	28	70%
	ウ. あまりなかった	3	8 %
	エ. まったくなかった	0	0 %
3 授業で取り組んだ、ペアやグループでの「話し合い活動」において、友達の意見や発表を聞いて自分の意見や考えが変わることがありましたか?	ア. よくあった	11	27%
	イ. ときどきあった	19	47%
	ウ. あまりなかった	9	23%
	エ. まったくなかった	1	3 %
4 授業で取り組んだ、ペアやグループでの「話し合い活動」は自分の考えを整理したり、発展(深化)させるのに役立ちましたか?	ア. 役立つ	10	25%
	イ. どちらかといえば役立つ	22	55%
	ウ. あまり役立たない	7	17%
	エ. まったく役立たない	1	3 %

と思うか」という質問に「とても大切だと思う」と答えた生徒が17%から35%へ18ポイント増加し、肯定的な生徒の合計が86%から98%へと12ポイントも増えている(図8)。その理由としては、「話し合うことで新しい発見ができる」「いろんな考え方を聞くことで視野が広がる」「人の意見を聞くことで自分がわからなかったことを学べることがある」など、思考の広がりや新しい視点の発見をあげる生徒がほとんどだった。しかし一方

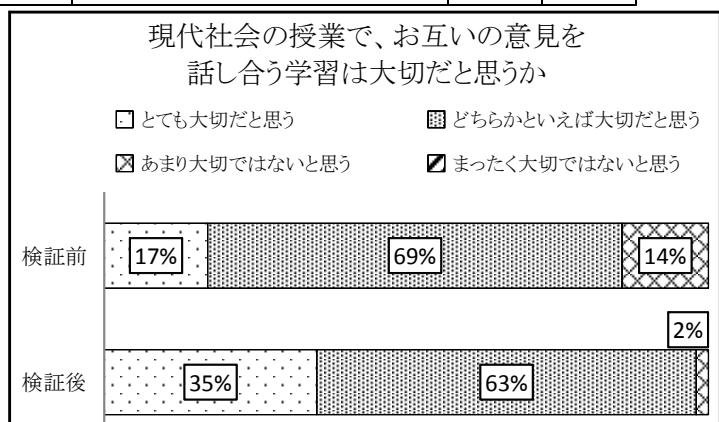


図8 話し合いの重要性に対する意識の変容

で、「どのような授業形態が自分に合っていると思うか」という質問に対しても、「ペア学習」は14%から24%と10ポイント増加しているが「グループ学習」は37%から29%と8ポイント減少していることがわかる(図9)。この二つの結果から、今回の検証授業ではグループでの話し合いをあまりうまくできなかつたと感じている生徒たちがグループ学習に対して苦手意識を持ってしまったが、話し合う学習活動については有益だと感じている生徒が多いことから、継続しえることは充分に可能であると考えら

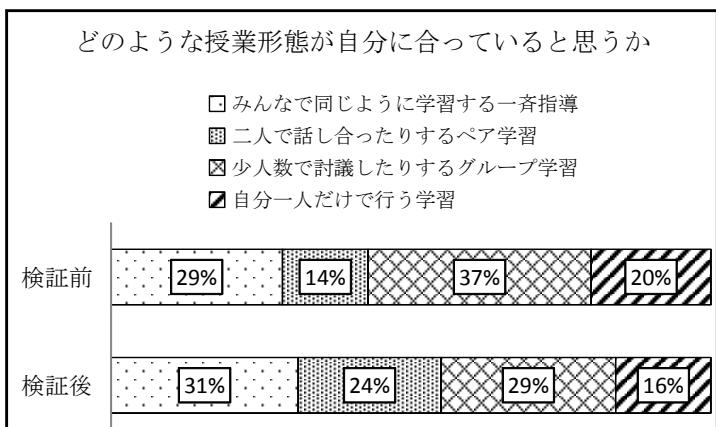


図9 授業形態への意識の変容

また、検証後のアンケートの自由記述部分で目についた意見を抜粋した（表3）。ここからは、授業形態の変化に最初は戸惑ったが、「慣れてくると楽しい」「話したことのない人と話すことができた」など、協同学習については前向きにとらえる意見があることがわかる。また、「この授業は長期的に行うことで効果が得られるものかなと思う」という意見からも、互いの意見を交換し合うこと自体は価値のあることだと認識しているが、話し合いの質を高めるためにはより多くの経験が必要と感じていると分析できるので、年間を通して計画的・継続的な指導を図ると同時に、進行の上手な生徒を各グループに割り当ててみると、話し合いがスムーズに進められるような手立てを加えていく必要がある。

表3 検証後アンケート自由記述

- 急に授業形態が変わり、最初は少し戸惑いましたが、慣れてくると楽しく感じました。
 - 授業でこんなにたくさんグループで話し合ったりしたことがなかったので、最初は戸惑ったけれど、クラスで話したことのない人と話すこともできたり、友達の意見とかを聞いて自分の意見が変わったりすることもあったので、新鮮だなと思いました。
 - 最初は戸惑ったけれど、慣れた。グループ活動は、話しづらいメンバーだったのでやりづらかった。日頃からやっていることではなかったこともあります、この授業は長期的に行うことで効果が得られるものかなと、受けていて思った。

IV 成果と課題

本研究は「知識の定着を促し思考力・判断力・表現力を高める指導の工夫」をテーマに、知識ピラミッド図の作成とそれをもとにした協同学習による学習効果の研究を進めてきた。以下にその成果と課題をまとめるとする。

1 成果

- (1) 生徒に知識ピラミッド図を作成させることは、知識を構造化し、定着を促すのに効果があった。
 - (2) 知識ピラミッド図の作成過程や発展的な課題を考える際に、協同学習によって意見の練り合いが起こり、思考力・判断力・表現力が高まった。

2 課題

- (1) 生徒に独自の知識ピラミッド図を作成させるための工夫が必要である。
 - (2) 知識ピラミッド図の作成や協同学習を効率よく行うためには、長期的な視点で授業計画を立てて、手立てを工夫しながら継続的に取り組む必要がある。
 - (3) 協同学習で、話し合いが活発になるようなグループ構成の工夫が必要である。

＜主な参考文献＞

- 北俊夫 2011 『社会科学力をつくる「知識の構造図」』 明治図書
佐藤雅彰, 佐藤学編集 2003 『公立中学校の挑戦—授業を変える学校が変わるー』 ぎょうせい
岩田一彦 2001 『社会科固有の授業理論30の提言—総合学習との関係を明確にする視点ー』 明治図書